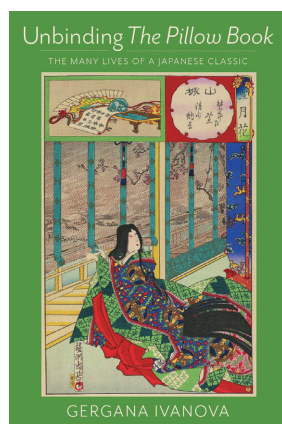


ゲルガナ・イワノワ

『ある日本古典文学作品の再構築  
——『枕草子』の複数の生』

Gergana Ivanova, *Unbinding The Pillow Book: The Many Lives of a Japanese Classic*

ブラダン・ゴウランガ・チャラン



Columbia University Press, 2018

日本の古典文学作品の受容に着目した研究はここ数年で日本国内だけでなく、海外でも増えてきた。ヴァルター・ベンヤミンが指摘した文学作品の「死後の生」(ドイツ語: *Überleben/fortleben*)の研究は盛んだ。評者の知る限り、書評対象のゲルガナ・イワノワの著書は英語圏における『枕草子』の受容史に着目した二冊目の研究である。その一冊目は、日本研究者のヴァレリー・ヘンニチュックによる *Worlding Sei Shonagon: The Pillow Book in Translation* (二〇一二年) である。しかし、この二冊をそのまま比較することはできない。ヘンニチュックは『枕草子』の一部を取り上げて、この作品はこれまでに訳された諸外国語訳の該当部分の比較検討をし、本作品の世界流通に伴う複雑な受容過程の解明に力を入れている。ヨーロッパの十六カ国語に訳された『枕草子』の五十に

及ぶ翻訳版の比較を通して、文学作品は他言語へ翻訳されることによつて原典からいかに変容を遂げ、どのように世界文学へ参入するのか、その過程を詳細に明らかにしようとした。一方で、イワノワは江戸時代後期から現在に至るまで、日本国内における『枕草子』の受容形式を詳しく追跡している点で、上記ヘンニチュックの著書と大きく異なる。

本書の「まえがき」で明記されたように、著者は二〇一四年に刊行されたジョシユア・モストウの大著 *Courty Visions: The *Ise* Stories and the Politics of Cultural Appropriation* や二〇一三年に出版されたマイケル・エメリックの *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature* で採用された研究方法と同じ手法を用いている。モストウとエメリックの研究は、とりわけ英語圏における『伊勢物

語』と『源氏物語』の受容研究において大きく貢献したが、本書の刊行は『枕草子』の受容研究にとって重要な出来事として捉えるべきである。本書は、先行研究では着目されてこなかった『枕草子』の多義にわたる捉え方をはじめて検討を行いつつ、日本の古典文学におけるジェンダー・セクシュアリティの問題をはじめ、ジャンルの問題、カノン化（正典化）と翻訳など様々な視点から批判的に攻めた点で優れている。凡そ四百年にわたる本作品の受容を追跡しつつ、各時代におけるその社会的な機能を検証することで、著者はこれまで文学研究者が答えようとした問題の解明に挑戦していく。はたして、混じりけのないいわゆる「オリジナル・純粋」な古典文学作品は存在するのか。『枕草子』という作品とはいかなるものなのか。本書では、著者がその解明を狙っている。

本書は、六つの章により構成され、それぞれがテーマごとに分けられている。第一章では、本書の研究内容と研究方法が提示されている。本書の目標は、著者の言葉を借りて言うならば「日本の女流作家に対する固定観念と強く結びつけられてきた彼女たちの文学作品の構築性を脱構築すること（一五頁）」であり、そうすることによって『枕草子』はいわゆる「随筆」であり、その作者である清少納言が自画自賛の女流作家であったという一方的に押し付けられてきたステロタイプ・イメージから解放する（一四頁）」とい

うことである。もはや知る由もない、純粋な原典を追跡するという無益な試みをせずに、著者はあえてこの作品の派生に着目している。なぜなら、こうした研究方法は、読者が「想像」した文学的な過去を知る上で重要であると同時に、文学作品が持つ社会的な機能の解明にも寄与するからである。このように、序論は続く章で議論される内容を発展させるための土台をなす。次の第二章では、江戸時代に執筆された『枕草子』の三つの注釈書が検討され、その執筆者は本作品をより読みやすくするため、いかに恣意的に複数の写本から内容を選択し、本作品を整理したのかが論じられている。このように必然性があつたとは言いがたい内容の整理が江戸時代に行われた結果、『枕草子』は「随筆」に分類されることになり、従来の多様な読み方は無視されてしまった。

『枕草子』の多様な想像の一つには、そのエロチックな性格があるが、次の第二章と第三章では、その詳細が提示されている。例えば、江戸時代に遊郭で働いた女性らはこの作品を案内書として使ったが、これは単なるパロディとして捉えられがちである。一方で、著者は当時の社会状況を踏まえた上で、この作品が果たした社会的な機能を明らかにした。つまり、それは幕府によって定められた社会的な階級制度やアイデンティティを転覆させるための戦略であつた。江戸期の女性性は、清少納言の通俗的なイメージとこの作品に含まれる教訓的な様相を、家庭内のみならず遊郭に

おける自身の上昇戦略として使っていたのである。

同じく、この作品を基にして江戸時代に作成された複数の絵本や性生活に関する本、あるいは書簡文の教科書などは、とりわけ女性読者層を対象にしたことから明白のように、特定のジェンダーの読者層を対象に施された解釈は、江戸時代の執筆者らにより作られた歴史的なイメージである。江戸時代に構築された清少納言のこのような女性らしさのイメージは、現在でも一般的に想像されることだけでなく、学問的な議論のなかでも確認できる。

こうした内容は、本書の最後の二章で取り上げられている。本作品を基にして近年作られた少女向けの漫画や『桃尻語訳』のように女性の流行語を使用した翻訳版の分析から分かるように、この作品はもはや江戸時代のように女らしさの育成を目的で使われなくなつたとは言え、この作品と女性との連想は相変わらず続いている。実際、清少納言の色っぽく、溢れ出る色気のイメージは、この数年で外国語における映画や小説としてアダブテーションされたことによって、いまや日本国内のみならず、海外にまで伝わっているのである。こうしたジェンダー・セクシュアリティの視点から著者が『枕草子』を検討したことは、称賛に値する。

本書が対象とした広い研究範囲は、その強みでもあれば、弱点でもある。著者の分析から明らかなように、『枕草子』には権威のある原典が存在しないため、江戸時代の男性注釈者による改訂を

通して、異質なテキストが混在することになり、そのことが「随筆」という評価につながった。同時に「随筆」という作品ジャンルの流動的な定義こそが、本質的に異なる作品である『枕草子』を、『方丈記』や『徒然草』と同類として扱うことを可能にした。その意味で本研究は、本書のカバーに記載された宣伝文句の通り「テキストの複雑な受容は、まさに取り戻すことのできない過去と動的な現在の間に行われるある種の対話である」という事実をもの語っている。しかし、著者が対象とした研究範囲はあまりにも広すぎているからか、例えば現代社会における『枕草子』の受容に関する検討は必ずしも十分とは言えない。おそらく著者は、十八世紀から現在に至るまで、『枕草子』は切れ目なく女性読者と深く関係してきたというジェンダー論的な視点からこの作品を論じるため、更なる検討の余地があることを認識しつつ、あえて最後の章を追加したように思われる。

第五章についても同じことが言える。この章では、明治期におけるこの作品の受容について論じられているが、検討対象は学界での議論のみに集中し、この時期における本作品の社会的な機能に関して検証されていない。むしろ、教育機関での教科書は重要ではあるが、例えば当時の通俗的な雑誌や新聞など学界と異なる性格を持つ媒体における本作品の受容を検討することで、明治期の社会における『枕草子』の社会的な機能が見えてきたかもしれない

ない。いずれにしても、現代のポップカルチャーなどを媒介にした本作品の受容、特に清少納言のビジュアルイメージについては、著者の今後の研究に期待している。

同類の研究と同じく、イワノワは議論を展開するに当たり大量の第二次資料を利用し、あえて研究対象を広くとらえることで、『枕草子』の女らしさという性格は作られたものであるという事実を、巧みに解き明かすことに成功している。この点において、著者は最高の賞賛に値する。また、本書には詳細な注が施されており、膨大な量の先行研究の情報（本書の約四分の一の量に当たる）も提示され、とりわけ文学の受容研究に関心のある大学院生や研究者にとって有益である。

#### 参考文献

- Emmerich 2013  
Michael Emmerich. *The Tale of Genji: Translation, Canonization, and World Literature*.  
Columbia University Press, 2013.
- Henituk 2012  
Valerie Henituk. *Working Sei Shonagon: The Pillow Book in Translation*. University of  
Ottawa Press 2012.
- Mostow 2014  
Joshua S. Mostow. *Courty Visions: The Ise Stories and the Politics of Cultural  
Appropriation*. Brill, 2014.